

②個性を生かし、自分で生き方を決める障害者

障害に対する理解や ICT（情報通信技術）の高度化が進み、ユニバーサル社会が実現したことで、障害の有無によって分け隔てられることなく自立と社会参加を果たし、しごとやスポーツを満喫している。

2040年の生活シーン

<プロフィール>

- 20代の男性。阪神間のマンションで一人暮らし。大学2年生の時、バイクに乗っていて交通事故に遭い、右半身が麻痺している。
- 障害が残ると知ったときは、どのように生活していくか不安になった。しかし、バーチャル・リアルティを使ったリハビリと、脳波を伝達して筋肉に意思を伝え、肢体を動かすロボットスーツのおかげで、在籍していた大学の工学部と下宿生活に戻ることができた。

<しごと>

- 事故後のリハビリの中で、障害者の生活をサポートする情報通信技術の重要性を実感し、大学での研究テーマに選んだ。卒業後は、希望どおり情報システム会社に就職し、障害のある人が情報にアクセスするための技術や、高齢者を含めた身体機能の低下を補助する技術の開発に携わっている。

<日常生活>

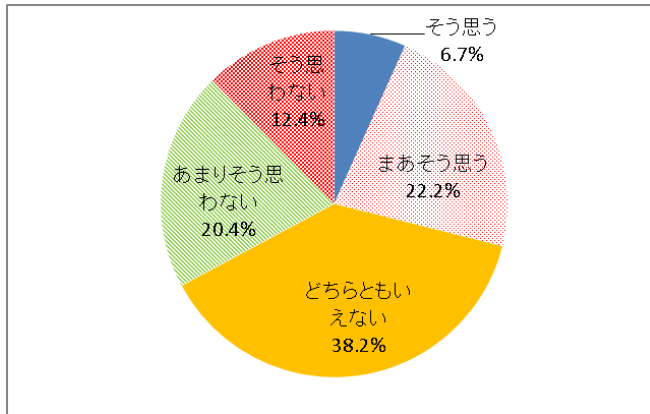
- 高校、大学と陸上部で長距離走をやっており、事故後も、リハビリしてから復帰した。就職してからは会社の陸上同好会に入り、来月は、県の北部で開催されるマラソン大会に出場する予定だ。
- マラソン大会の日は前泊することになるので、その手配をした。同好会からは障害のある人もない人も大会に参加し、障害の程度も様々だが、交通機関も宿泊施設もバリアフリー化されているので、みんなで一緒に移動し、宿泊することになった。道中からはしゃぎ過ぎて、同好会で知り合った婚約者の彼女にたしなめられないよう気をつけないといけない。

<街中の風景>

- 今日は、練習の後、同好会の仲間と行きつけの店で食事をした。この店は、知的障害のある人が共同経営者の一人であり、食材の組合せや色彩感覚にあふれた盛り付けが斬新な創作和食の店だ。知的障害や精神障害のある人が体調に合わせ、フレックスタイム制で働き、調理や接客を担当している。
- こうした知的障害や精神障害のある人が、働いて手にしたお金を管理できるよう、学校現場での金銭教育の取組も進んでいるようだ。私たちを見送ってくれたシェフは、いつか自分の店を出せるよう、腕を磨きながら頑張ってお金を貯めています、と話してくれた。
- 店を出てから駅までの道には、特別支援学校の生徒や知的障害を持つプロのアーティストの手によるオブジェが飾られていて、鮮やかな色彩やデザインが目を引く。気に入れば購入することができるので、私たちの新居にぜひ飾りたい。

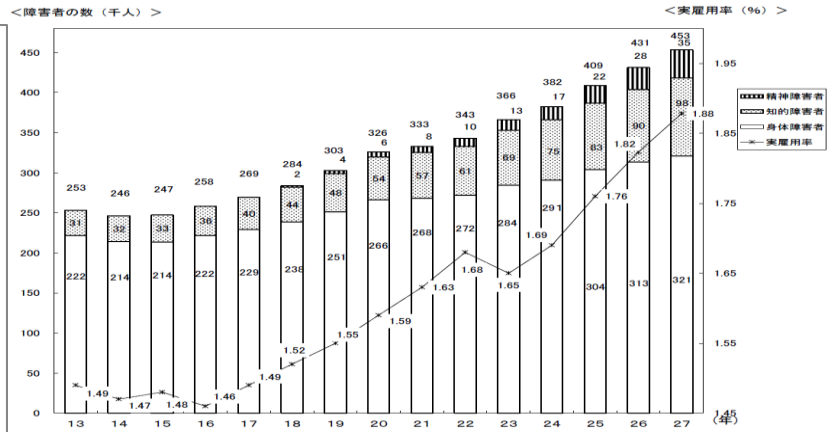
現状や課題

【住んでいる地域は障害のある人にも暮らしやすいと思う人の割合（県）】



（出典：平成 27 年度「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査）

【障害者の雇用者数推移（国）】



（出典：厚生労働省「平成 27 年 障害者雇用状況の集計結果」）

見えてきた兆し

【バーチャルリアティー技術の活用】



※ヘッドマウントディスプレイの視線追跡機能を用いることにより、従来困難であった障害者によるピアノの演奏を可能にした。

（出典：VR Consortium「VRクリエイティブアワード2015」）

【ユニバーサルツーリズム】



全く段差が無いホテルではなく、あえて段差があるホテルに宿泊し、地域の介助事業者による介助やホテル従業員の方の“おもてなし”で、ハード面の障壁をクリアしている。

（出典：公益社団法人ひょうごツーリズム協会トピックス）

【ロボットスーツの活用】



（出典：ロボット革命実現会議第2回「介護分野におけるロボットの活用」）

【障害者スポーツ】

○兵庫県障害者のじぎくスポーツ大会



（出典：公益財団法人兵庫県障害者スポーツ協会だより平成 27年 9月号）

【専門家等の意見】

○障害は社会的障壁が生み出したものという認識を持ち、障害者の自立と社会参加を制約している要因が何かを考えることが重要である。

○障害は、種別や性別、年齢等によって、求めている配慮や支援も異なることに留意し、特性に応じたアプリケーション開発等を進めることが必要である。